



# 学内広報



2002. 5. 8  
東京大学広報委員会

## 東京大学名誉博士称号授与制度



東京大学名誉博士第1号としてケンブリッジ大学  
トリニティ・カレッジ学長のアマルティア・セン博士に称号授与

## 目 次

はじめに（副学長 廣渡清吾） .....	3
東京大学名誉博士称号授与制度について .....	4
アマルティア・セン博士プロフィール .....	4
功績書（和文） .....	5
功績書（英文） .....	6
名誉博士称号授与式 総長挨拶 .....	7
アマルティア・セン博士記念講演 「文明は衝突するのか：問いを問い直す」 .....	8
（全文和訳：訳：佐藤 仁助教授・新領域創成科学研究科）	
（資 料）	
東京大学名誉学位創設に係わる検討WGの設置について .....	15
東京大学名誉博士称号授与規則 .....	16
東京大学名誉博士称号授与に関する申合せ .....	17
名誉博士称号授与式・記念講演会次第 .....	18
名誉博士称号授与を伝える新聞記事の一覧 .....	18

## は じ め に

2002年2月19日、東京大学はアマルティア・セン博士に東京大学名誉博士の称号を授与する式典を行なった。これまで東京大学は、名誉博士の制度をもたなかった。2001年4月に就任した佐々木毅総長は、名誉博士制度の意義を強調して、これを創設することを評議会に提案し、評議会は2001年11月に東京大学名誉博士称号授与規則を制定した。セン博士は、同規則に基づき、評議会の議を経て東京大学名誉博士の称号を授与されたものである。

東京大学は、世界の学術研究の発展を担い、人類の平和と福祉に貢献する有為の人材を育てることを目的としている。この目的は、世界の様々な大学とともに、東京大学が共有するものであり、そこには自ずからグローバルな学術的共同体 (Scientific Community) が生成している。東京大学は、この共同体の発展に顕著な功績をあげ、私たちに勇気を与えてくれる人々を、東京大学との関係がいかなるものであるかに関わることなく顕彰し、私たちの感謝を公的に表明することが、グローバルな学術的共同体の発展を役割とする者のなすべきことであると考えるのである。

セン博士は、インドのシャンティニケタンに生まれ、カルカッタ大学で学び、イギリス、アメリカを拠点に多くの研究成果を発表してきたアジア出身の学者である。セン博士の業績は、高度に理論的な経済学の仕事であるが、その基底には世界の貧困と開発への深い倫理的な関心が刻まれている。こうしたコンテキストにおいて、東京大学が東京大学名誉博士の称号を最初に授与する者としてセン博士を選考したことは、極めて意義深いものであると思われる。

学内広報の月号は、以上のように名誉博士制度の創設及び最初の称号授与の意義に鑑み、これに関する記録を広く普及するために、特集号として刊行するものである。

副学長 廣 渡 清 吾

## 東京大学名誉博士称号授与制度について

### I. 東京大学名誉博士称号制度の創設

#### 1. 制度創設の経緯

東京大学は、平成13年9月にワーキンググループを設置し、名誉博士称号制度創設の意義、及び創設する場合の制度等について検討を行い、平成13年11月の評議会において「東京大学名誉博士称号授与規則」を制定し、制度を創設した。

#### 2. 制度創設の意義

本制度は、学術文化の発展に特に顕著な貢献をした者、又は本学の教育研究の発展に特に顕著な功績があった者を顕彰することにより、本学における教育研究の発展及びその基盤を社会に対して顕やかにし、本学の国際的地位を確固たるものとしていく上で極めて有意義であるとともに、世界における学術文化の一層の発展に寄与するものである。

#### 3. 称号授与の要件等

称号は「東京大学名誉博士」とし、学術文化の発展に特に顕著な貢献があり、本学において顕彰することが適当と認められる者、又は本学の教育研究の発展に関して、国際的観点からその功績が特に顕著であった者に授与することができるものとしている。

### II. アマルティア・セン博士に対する名誉博士称号の授与について

#### 1. 被授与者の決定

本制度に基づき、名誉博士称号授与審査委員会において最初の被授与者に、アマルティア・セン博士（ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ学長）を選出、1月22日（火）の評議会において決定し、東京大学名誉博士の称号を授与することとした。

セン博士は、開発と貧困の問題に関する研究業績により、広汎な学問分野にインパクトを与え、世界の学術文化の発展に対しすぐれて顕著な貢献をなしたものとして、授与が決定されたものである。1998年にノーベル経済学賞を受賞している。

#### 2. 東京大学名誉博士称号授与審査委員会

第1回 平成13年12月18日（火）

第2回 平成14年1月21日（月）

#### 3. 授与式・記念講演会

開催日：平成14年 2月19日（火）

場 所：東京大学経済学研究科棟地階大講義室

東京大学名誉博士称号授与式 17:00～17:30

記念講演会 17:40～18:30

カクテルパーティー

18:45～19:15

記者会見

19:15～19:45

### アマルティア・セン博士プロフィール

1. 氏 名 アマルティア・セン  
(Amartya Sen)
2. 性 別 男
3. 生年月日等 1933年11月3日  
インド シャンティニケタン 生
4. 国 籍 インド
5. 履 歴 等
  - (1) 学 歴  
カルカッタ大学 プレジデンシィ・カレッジ 1953卒業  
ケンブリッジ大学 トリニティ・カレッジ 1959  
Ph.D.取得
  - (2) 最近の職歴  
ハーバード大学レイメント・ユニバーシティ教授、  
同大学経済学及び哲学教授 1988-1997  
ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ学長  
1998. 1～（現職）
  - (3) 主な受賞等  
インド経済学会会長 1989  
アメリカ経済学会会長 1994  
オックスフォード大学名誉文学博士 1996  
キール大学名誉博士 1997  
ハーグ社会科学研究所名誉フェロー  
ロンドン大学ロンドン・スクール・オブ・エコノ  
ミクス名誉フェロー  
サセックス大学開発研究所名誉フェロー  
デリー大学名誉教授  
英国王立経済学会名誉副総裁 1988～  
国際経済学会名誉会長 1989～  
ジーン・メイヤー・グローバル・シティズンシ  
ップ賞 1993  
アジア協会インディラ・ガンジー・ゴールド・メ  
ダル 1994  
エディンバラ・メダル 1997  
第9回カタロニア国際賞 1997  
ノーベル経済学賞 1998

## 功 績 書

貧しい人のために社会は何をなすべきか。そのような厚生経済学における規範的な問いは、一見妥当な五つの公理を置くだけで個人の選好からまともな社会的選択ルールを導くことはできないという不可能性定理をケネス・アローが証明して以降、久しく等閑視されてきた。1970年に発表されたセン教授の『集合的選択と社会的厚生』は、この障害を乗り越え、この問題に対するわれわれの理解を深め、厚生経済学に倫理的側面を復活させるきっかけとなった。セン教授は、パレート派リベラルの不可能性定理を証明することにより、また自らの効用のみに基づいて行動するという「合理的な愚か者」の仮定を批判することによって伝統的な厚生経済学が仮定する情報的基礎が不適切であることを示した。このような不適切な情報的基礎こそが、伝統的経済学が不平等に対して意義あることを主張できない理由である。われわれは人々の福祉を正しく捉える情報的基礎を必要としているのである。

人々の福祉を正しく捉えるためにセン教授は「潜在能力アプローチ」を提唱する。かれによれば、人々の福祉は、人が何を行えるのか、どんな状態になりうるのかという可能性によって測られるべきものである。何ができるのか、どんな状態になりうるのかはそれぞれ機能と呼ばれ、そのベクトルの集合が潜在能力と呼ばれるものである。セン教授は、平等も潜在能力の領域で追求されるべきであると主張する。潜在能力は人がなし得ることの範囲を示しており、その意味で自由の程度を示している。潜在能力によって発展を再定義したとき、発展とは人々の自由に向けた道なのである。このような潜在能力の考え方は、国連の「人間開発指標」の中にすでに取り入れられている。

貧困研究においても、セン教授は理論・実証の両面で主導的な役割を果たしてきた。理論的には、1976年の論文で五つの公理からいわゆるセンの貧困指数を導き、それに触発されて貧困指数に関する理論的研究が著しく進み、多くの貧困指数が提案された。実証分析に関しては1981年に発表された『貧困と飢饉』において、かれはエンタイトルメントという新しい概念を導入し飢饉の分析に応用した。飢饉の主たる原因は食糧不足であるというそれまで広く信じられてきた説を否定し、飢饉の真の原因は社会の特定グループの食糧に対するエンタイトルメントが奪われることにあると主張した。また、セン教授は飢饉を防ぐために民主主義が重要な役割を果たすことを強調してきた。この研究は、その後、セン教授らによる一連の貧困・飢餓・生活の質に関する研究へと展開し、80年代・90年代における発展途上国の貧困研究を促進した。そして、このような貧困問題に対する関心の昂まりは、1990年代に入ってそれまで成長指向であった発展途上国に対する援助を貧困指向のものへと転換させる契機となった。

以上のように、セン教授の業績は、終始、人間社会に

対する深い倫理的な関心に導かれ世界の学術文化の発展に対して顕著な貢献を行ったものであり、東京大学名誉博士の称号を授与するにふさわしいものであると認められる。

よってここに、東京大学総長は、東京大学評議会の議を経て、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ学長、アマルティア・セン教授に対して、東京大学名誉博士の称号を授与するものである。



▲ アマルティア・セン博士の功績書を読む佐々木総長・岩井経済学研究科長



名誉博士称号授与式の参加者

**Amartya Sen**  
Doctor, honoris causa

What should a society do for its impoverished people? Such a normative question of welfare economics was long neglected after Kenneth Arrow proved in the early 1950s the so-called Arrow's impossibility theorem, which insists that no social decision rule can be derived from individual preferences if five seemingly reasonable axioms are postulated. Professor Sen's monograph *Collective Choice and Social Welfare* of 1970 was a breakthrough regarding this obstacle, promoting our understanding of the problem and restoring an ethical dimension to welfare economics. Professor Sen demonstrated the irrelevance of the informational base assumed in traditional welfare economics by proving the impossibility of a Paretian Liberal and by criticizing the assumption of "rational fools" who make every decision based on their own preference alone. Such an irrelevant informational base makes it impossible to say anything significant about inequality. We need a more relevant informational base to measure the well-being of people.

For this purpose Professor Sen proposes the capability approach. He argues that the well-being of a person should be measured in terms of what a person can do and can be, each of which is called "functioning," and the set of vectors of these functionings is called the "capability" of the person. Professor Sen insists that equality should be sought in the space of capability. Capability indicates a range of what a person can do and, in this sense, the extent of freedom that the person enjoys. Therefore, if development is redefined in terms of capability, it means a way towards the freedom of people. Professor Sen's idea of capability is incorporated into the construction of the United Nation's Human Development Index.

In studies on poverty, Professor Sen has played a leading role both theoretically and empirically. Theoretically, in 1976 he derived the so-called Sen's poverty index by postulating five axioms. This pioneering work stimulated theoretical research on the poverty index and many poverty indices have been proposed by other research. Empirically, in his book *Poverty and Famines: An Essay on Entitlement and Deprivation* of 1981, he introduced "entitlement" to the analysis of famine and proposed that the major cause of famine is not a shortage of food as is generally believed but the deprivation of entitlement to food from some groups in society. Professor Sen also emphasizes the importance of democracy in preventing famine. This research developed into a series of studies by him and his associates on poverty, hunger, and quality of life, which also stimulated research by others on poverty in developing countries in the 1980s and 90s. Such a growing concern for poverty issues in the 1990s shifted growth-oriented assistance to developing countries towards a more poverty-oriented one.

Professor Sen has in this way been led by a deep ethical concern for human society and his achievements have contributed greatly to the development of academic culture worldwide. Therefore, he has been deemed very worthy of the bestowal of an honorary doctorate by the University of Tokyo.

The President of the University of Tokyo, on behalf of the Senate of the University, presents Professor Amartya Sen, Master of Trinity College, the University of Cambridge, with the title of Doctor, honoris causa.

## 名誉博士称号授与式 総長挨拶

アマルティア・セン博士およびご列席の皆様へ東京大学総長として、ご挨拶を申し上げます。ご来臨くださいましたセン博士に心から御礼申し上げます。またご多用のところ、本日の授与式にご出席くださいました皆様方に厚く御礼申し上げます。

本席には、

H.E. Mr. Jamil Majid (ジャミル マジッド)

バングラデシュ特命全権大使閣下

Mr. Biren Nanda (ビレン ナンダ)

インド特命全権臨時代理大使

Stuart Jack (スチュアート ジャック)

英国公使及び同令夫人

Mr. Mike Winter (マイク ウィンター)

ブリティッシュ・カウンシル駐日副代表

にもお出でいただきましたので、皆様にご紹介いたしますとともに、ご出席に感謝申し上げます次第であります。

セン博士は、経済学理論の立場から、20世紀の世界が抱えた開発と貧困の問題に正面から取り組み、大きな成果をあげられました。私たちは、博士のお仕事が人類に対する深い倫理的な関心に導かれたものであることを知ることができます。東京大学名誉博士の授与は、広く世界の学術文化の発展に貢献し、人類の共有する知的な資産を創造した科学者を、東京大学が世界の学術文化のコミュニティーの一員として顕彰しようとするものであります。

東京大学は、セン博士の業績に対して心から尊敬と感謝の気持ちをもつものであり、初めての東京大学名誉博士の称号をセン博士にお贈りすることができたことを、心から喜び、名誉とするものであります。

東京大学は、21世紀の世界において、これまで以上に学術文化の発展に貢献したいと考えます。今回、セン博士に対する名誉博士称号授与は、そのような東京大学の自覚を示そうとするものであるとご理解いただければ、誠に幸いです。

本日もご列席の皆様へ、セン博士への東京大学名誉博士称号授与とともに祝っていただいたことに、あらためて感謝申し上げます。最後に、セン博士がその健康に十分配慮され、セン博士のお仕事は今後一層の成果を生み出し、私たちに刺激と希望を与えてくれることを心から祈念して、東京大学総長としてこの短い挨拶を閉じることいたします。ありがとうございました。



授与式で挨拶をするアマルティア・セン博士



学位記の授与



授与式に参列した各国大使など

## 〈記念講演〉

文明は衝突するのか：問いを問い直す<sup>①</sup>

## Questioning the Question: Do Civilizations Clash ?

Amartya Sen (アマルティア・セン)

訳：佐藤 仁 (新領域創成科学研究科・助教授)

このようにすばらしい形で東京大学の仲間入りをする機会が与えられたことを大変光栄に感じ、また感謝いたします。東京大学との学問的な関係は、これからの私にとってかけがえのないものになるでしょう。

講演の主題として私が選んだのは、今日世界で起っているとされる「文明の衝突」についてです。この主題は、サミュエル・ハンチントンのよくできた著名な本が出版されてから広く議論されてきました<sup>②</sup>。9月11日の恐ろしい出来事は、すさまじい紛争と不信の渦巻く世界へと私たちを先導することになっただけでなく、いわゆる「文明の衝突」への関心を大きくしました。事実、多くの有力な論評者たちは、(特に、ハンチントンが示したような文化や宗教を基準にした)概念的な区分と、今日の世界各地でみられる残虐行為との間には確固とした連関があるかのように見がちでした。

たしかに、そこには何らかの関連があるのかもしれませんが、それが正確になんであるかを精査し、吟味する必要があります。また、文明間の衝突という特定のイデオロギーに基づいた世界観それ自体が、世界での物理的な対立や暴力的な事件を煽ることになってはいないか、と問わなくてはなりません。私はこの講演で、「文明は衝突するのか」という問いが間違った方向の研究をはじめの契機をつくり、それを助長する作用があると主張するつもりです。その問いは、人類がはっきりとした形で個別に分類できるという、ほとんど分析されておらず、また十分に擁護されてもない前提に立脚しているからです。この問いに対して私たちがどう答えようと、つまり、文明が衝突するという理論に賛成だろうが反対だろうが、この問い方を認めたまま答えようとしてしまうと、世界の人々に対する非常に誤った認識を自動的に支持することになってしまいます。というのも、人々の分類には他にもさまざまな方法があり、文明に基づく分類が他のものよりもア priori に上位にあるとか、優先されるとは限らないからです。

① 2002年2月19日に東京大学で行われた講演。

② Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order* (New York: Simon and Schuster, 1996).

### 複数性 (pluralities)、優先順位、そして意思決定

今日の世界に潜在する紛争の主要な源は、すでに述べたような、文明に基づいて人々を手際よく分類できるという前提にあると私は主張したいのです。さらに、このシステムこそ今日の世界で人類を分類する唯一のものであるという前提も紛争の源の一つであるといえましょう。

文化、宗教、文明などの基準に基づいた特異な分類の持つ圧倒的な力を暗に信じ込むことは、世界の紛争の火種をかえって増やすことになります。特定の区分だけを重んじて人々を分割しようとする発想は、近頃「浅はかな考え」として笑いものにされることの多い「人類みな平等」という古い言い回しに反するだけではありません。むしろ、あまり議論されていないのですが、「人間は多様で異なっている」という、よりの射た理解とも対立してしまうのです。世界の調和にむけた最も大きな希望は、たった一つの排他的な分割の境界線が作り出す明確な区分とは反対に、互いに越境するわれわれのアイデンティティの複数性にあると論じたいのです。対立が、たった一つの支配的な分類に集約されてしまうと、私たちが共有する人間性は野蛮な挑戦を受けることになります。この世界を作っているのは、複数性をもつ多様な分類であるにもかかわらず、上のような一つの分類だけに頼ることは人々の間の溝をかえって深いものにするだけです。

私たちは普段の生活の中で、さまざまな集団に属していることを自覚しています。それらすべてに属しているのです。同じ人物が、アメリカ人で、ハワイ出身で、日系で、キリスト教徒で、共和党支持者で、女性で、肉食主義者で、長距離ランナーで、歴史家で、教師で、異性愛者で、ゲイ/レズビアン権利の擁護者で、詩人で、バードウォッチャーで、環境保護の活動家で、テニスのファンで、ジャズを好み、宇宙人がすばらしい乗り物にのって定期的に地球を訪れることを深く信じている人であることはありえるのです。

これら一つ一つの集団のすべてに同時に所属していることが、その人に特定の、しかし、どの一つにも限定できないアイデンティティを与えています。どの集団をとってみても、その人のただ一つのアイデンティティにはならないし、唯一の所属分類になるわけでもありません。一つ一つの集団がもつ相対的な重要性は、そのときの文脈に応じて変わってきます。例えば、ディナーに出かけるときには、肉食主義者であることの方が、歴史家としてのアイデンティティや詩人としてのアイデンティティよりも重要になります。とはいえ、ある人のもつ複数のアイデンティティが互いに競合してしまう場面も多いでしょう。例えば、環境問題に関するデモ行進に行かなくてはいけない日と、面白そうなテニスの試合がある日が重なってしまったときに、環境活動家である自分とテニス愛好者としての自分に対する相対的重要度を決めなくてはならないかもしれません。人の注目や忠誠心を集めようと互いに競争しあう複数の要求にどう対処するかは、その人が決めなくてはいけないことなのです。そ

して、その決定は、文脈から独立した不変な分類に基づいて決まるのではなく、文脈に依存して決められることです。これと同じくらい重要なことですが、アイデンティティというものは（コミュニタリアニズムを支持する哲学者たちがよく主張するように）「見出す」だけのものではありません。それは選択の問題でもあるのです。

#### 諸制約と他者のまなざし

アイデンティティとは、それを「見出す」かどうかの問題である、と繰り返し言及されるのは、選択の幅がその実現可能性によって制約されているからであると言えるでしょう。制約はしばしば、とてもきつく効いてきます。実現可能性は、もちろん特定の状況に依存します。とくに、自分たちは、他人がそう思っているような人間ではないと他者をどこまで説得できるか、ということになると特に厳しい制約に直面しなくてははいけません。ナチス・ドイツにおけるユダヤ人や、アメリカ合衆国南部の暴力集団に直面したアフリカ系アメリカ人の場合、他人が自分につけたアイデンティティとは異なるアイデンティティを選択するのは容易ではありませんでした。他者の視線のなかで、自らのアイデンティティを選択する自由はときに非常に限られています。この点は議論の余地がありません。

私たちは、他者が自分たちをどう見ているのかをしっかりと自覚できていないことも時々あります。他者の見方は、自己意識とは異なるかもしれません。何年も前のことですが、私がケンブリッジ大学の学部生だったころに、偉大な経済学の教授でジョン・ロビンソンという先生がいました。議論が白熱した授業の最中に、彼女が私に言うには「日本人は礼儀正しすぎる。あなた方インド人は無礼に過ぎる。中国人がちょうどよい」と。私はこの一般化をすんなり受け容れました。他にできたことといえば、インド人がなぜ無礼になる傾向にあるのかを示す証拠を出すことくらいだったでしょう。しかし、そのとき分かったのは、私が何をしようとそのイメージはすぐには変わらないし、少なくとも先生の心の中では簡単には変わらないということでした（ちなみに、ジョン・ロビンソンはインド人に好意的な人であり、無礼な人が多いとは思ったようですが、それ以外の点では全く問題がないと考えていたようです）。

これまで取り上げたものとはタイプが非常に異なるのですが、私たちが自らのアイデンティティを再定義しようとするときに避けることのできない制約の例を、もう一つあげましょう。これは1920年代のイタリアの古い話ですが、興味深い道徳的寓意を含んでいます。話は、ファシスト党の政治リクルーターが農村の社会主義者を説得して、自分の党に引き込もうとするという話です。「ファシスト党に入るなんて、そんなこと、どうしてできましょう」と農村社会主義者は答えました。そして、「私の父は社会主義者でした。祖父も社会主義者でした。だから私がファシスト党に入るわけにはいかないの

す」と答えました。「それは何という論理でしょう」、田舎男のナイーブさに憤慨したファシスト党のリクルーターは言います。そして、「あなたの父親が人殺しで、あなたの祖父までが人殺しであったとしたら、あなたは どうしたのですか」と問います。「ああ、そうならば」と田舎男は答えます。「ならば、もちろんとっくにファシスト党に入っていましたよ」（笑）。他者が人を見る目を変えさせるといのは、本当に難しいのです。

もっと一般的にいえば、私たちがそう自覚しているものをアイデンティティとするにしても、あるいは、他人の自分たちに対する見方を採用するにしても、特定の制約の中で選択をしなくてはならないことに変わりはありません。しかしこれは、驚くべきことではありません。どのような状況下でも選択をするというのはそういうものです。選択理論の専門家であれば誰でも知っていることですが、あらゆる種類の選択は、常に特定の制約の下で行われます。これは、選択という行為の最も基本的な側面であるといえるかもしれません。例えば、経済学の初学者なら全員学ばなくてははいけません。消費者選択の理論では、予算というものがあり、それが消費者の支出能力に縛りをかけています。もっとも、予算制約が存在することは、選択できる余地がないことを意味するものではありません。制約の「枠の中」で選択をしなくてははいけないというだけのことです。初級経済学に当てはまることは、より複雑な政治的、社会的決定にも当てはまります。誰が見てもユダヤ人、誰が見てもアフリカ系アメリカ人、あるいは今日の騒乱の文脈でいえば、アラブ人、もしくはイスラム教徒としか見えないような人でも、その人々が同時に属している他のカテゴリーに照らして、当該のアイデンティティをどこまで重視すべきか、決めなくてはならないのです。

#### 文明に基づく分類

優劣つけがたい数多くの分類方法で人々を区分することは可能です。そして、どの区分をとるかは、国籍、居住場所、階層、職業、言語、政治、その他もろもろの側面で、私たちの生活にとっても重要な意味をもっています。宗教による分類は、近年とくに広く流布しているものですが、だからといって、それが他の区分を消してしまうと考えることはできません。ましてや、それが地球上の人々を分類する唯一適切な方法であるわけでもありません。アイデンティティは複数あること、そして、そのうちのどれを強調し、優先しようと、自己認識の選択権は私たち自身にあるということが重要です。最近、支持されている「文明による」分類は、そうとは分らない形で、この点を見過ごしています。文明に基づく分類は、しばしば宗教的な区分に沿って、あるいは、それと密接に結びついてきました。サミュエル・ハンチントンが、著書の中でいわゆる「文明に基づく」分類をするときは、西欧文明と「イスラム文明」「ヒンズー文明」「仏教文明」などを比べるという、まさに、宗教に基づく形になって

います。そこでは「中華」や「日本」といった雑種的な文明の分類も含まれているのですが、宗教的な違いに由来するとされる争いの舞台は、宗教と文化によって形づくられた支配的で強固な一つの区分に基づく機械的世界観で説明されています。

すべての人々を一律に、「イスラム世界」「キリスト世界」「ヒンズー世界」「仏教世界」などに分けることで、人々の間に垣根が作られ、それが人々を堅固な箱の中にしっかりと閉じ込めてしまうのです。人々の差異を見るときに唯一優れた見方であるとされるこの基準によって、他の仕切り方、例えば、貧者と富者、階級や職業による区別、支持政党による区別、国籍や居住場所による区別、言語グループによる区別などは、すべて隠されてしまいます。

さらに、この分類の粗雑さは、ハンチントンやその他の同じ考えをもつ人々に、「西欧文明」こそ世界で唯一、政治的な寛容さをもたらす源であると考えさせる方向性を備えています。寛容に注目することは、最近のヨーロッパの歴史（特に18世紀以降）の中でも力強い側面であることは確かで、西欧がなしえたことから世界が学ぶべきことが多いのは確かです。しかし、「文明の衝突」を擁護する人々は、人々を分け隔てる文明の一本線が唯一の重みをもつと信じ込むのと同じように、寛容が西欧文明の歴史を永遠にさかのぼることのできる、特別の特徴であるかのように見ます。これは歴史的事実に反しています。ハンチントンは主張します。「西洋は近代化する以前から西洋であった」と。もちろん、これは度を過ぎた単純化ではありますが、この点には後ほど戻りたいと思います。

#### 「唯一である」という扇動的な主張

「文明の衝突」論の最も基本的な弱点は、たった一つの、他を圧倒するとされる分類によって世界の人々を区分してしまう仕組みにあります。つまり、この議論は、私たちが文明は衝突しなくては行けないのかどうかを問うずっと以前の段階から間違っているのです。「文明は衝突するのか」という問いの形に沿ってしまうと、それにどう答えようとしても、狭く、恣意的で、誤解の多い方法で世界の人々を考えるよう追いやられてしまうのです。そして、この問いは、人を困惑させる力が大きいため、その理論を支持したい人だけでなく、それに反論したい人までが罨にかかり、あらかじめ特定された枠組みの中でしか答えられないように仕向けてしまうのです。「イスラム世界」や「ヒンズー世界」、あるいは「キリスト教世界」について話すという時点で、すでに一つの次元に人々を押し込めていることとなります。「西側世界は、イスラム世界と戦っているわけではない」とハンチントンに反論を唱える人々の多くでさえ、事実上、知らず知らず同じような狭い区分を共有するようになってしまいます。その区分法だけを重要なものとして受け容れてしまうことで、「衝突」の理論に疑問を呈し、反論

していた人々さえ、「文明の衝突」という主張に貢献することになってしまうのです。世界を文明の小箱に分けるというお粗末な世界観は、文明の調和を説く人にも、文明は衝突していると見る人にも同じように共有されているのです。

一つの区分法だけを信じ込むことは、状況の記述として深刻に間違っているだけでなく、潜在的には、倫理的そして政治的に危険です。人々は、自分たちを様々に認識しているのです。バングラデッシュ人のイスラム教徒は、単にイスラム教徒であるだけではなく、ベンガル文学を誇りに思うベンガル人かつバングラデッシュ人であることは十分ありえます。パキスタンからのバングラデッシュの分離は、宗教上の理由で促されたわけではなく、言語、文学、政治の方が効いています。ネパールのヒンズー教徒であれば、その人は単にヒンズー教徒であるだけではなく、政治的にも、民族的にも固有の特徴を兼ね備えているでしょう。そのことが、ネパールをして、インドとは異なる世界で唯一の公式のヒンズー国家に仕立てているのです。貧困であることも、様々な境界線を越えた連帯をもたらす大いなる源泉になることができます。俗に「反グローバリゼーション」派と呼ばれる運動家たち（これは期せずして世界で最もグローバル化している運動なのです）が強調している線引きは、世界経済の落ちこぼれを連帯させることを試みています。彼らの提唱する線引きは、宗教や国境、あるいは「文明」による区分を超越するものです。複数のカテゴリーを認めることで、硬直的な分離や、それが促す扇動的な側面に反対することになっているのです。

実際、人を憎むというのは簡単ではありません。オグデン・ナッシュの詩は、この点を見事に表現しています。「学校の子供なら誰だって夢中で人を好きになれるけど、憎むとなれば、それは技を要するものだよ」。しかし、憎むという技術は、熟練した芸術家や扇動者の手によって発達してきたもので、そこでは唯一の限定された好戦的なアイデンティティを相手に付与するという武器が選ばれることが多いのです。私たちは、唐突に、自分たちが自らそう認識しているような存在ではないということ、かなり異なったものであることを知らされるのです。私たちは、自分たちに敵対的な他のグループに戦いを挑まなくてはならない人々の一員にされるのです。私たちは、例えば、ユーゴスラビア人ではなく、実はスラブであることを強い調子で告げられます。「私とあなたはアルバニア人が嫌いだ」と教え込まれるのです。あるいは、実はルワンダ人ではなく、フツ族であると。だから、「ツチ族は嫌いである」と。インドが分割される以前の血なまぐさい1940年代を生きた年配の人であれば、それまで広くインド人や南アジア人、あるいは単に人間としてのアイデンティティをもっていた人が、突如として、単なるヒンズー教徒やイスラム教徒、あるいは単なるシーク派にとって代わり、「向こう側」の相手に激しく立ち向かわなくてはならなくなった身震いするような出来事を忘れる人はいません。憎しみを作り出す技術は、

たった一つの支配的で好戦的なアイデンティティのもつ魔術的な力と呼び起こすという形をとります。それは、他の所属や関係だけでなく、普段であれば自然に備えているような人間としてのやさしさや共感のあらゆるものを飲み込んでしまうのです。それが結果としてもたつたものは、素朴で剥き出しの暴力か、グローバルに行われる手の込んだテロリズムと蛮行でしかないのです。

### 歴史の無知

いわゆる文明を基準にした分類は、道徳や政治的な側面から破壊的であるだけでなく、認識論上の中身も非常に疑わしいものです。世界の人々をたった一つの排他的な基準に特化して区分けしてしまうので、多くの重要なことが捨棄されてしまっているのです。例えば、ハンチントンのいう「文明の衝突」の説明ではインドは「ヒンズー文明」として記述されてしまっていますが、実は、インドはインドネシアとパキスタンを除いて、世界のどこより多くのムスリム人口を抱えているという事実が見えなくなります。「イスラム世界」という恣意的な定義のなかに、インドをいれることはできるのかもしれませんが、できないのかもしれませんが。しかし、イギリスとフランスの総人口を足したものよりも大きな1億2千500万人のイスラム教徒がいるインドは、俗に「イスラム世界」と呼ばれるほとんどの国よりもずっと多いイスラム教徒を抱えているというのが変わらぬ事実なのです。同時に、「インド文明」を考える上で、歴史上、イスラム教徒が果たした大きな役割を無視することはできません。宗教上のコミュニティの障壁を超えた広範な相互作用を見なくては、インドの芸術や文学、音楽や食文化というものの本質と影響の範囲を理解することはできません<sup>③</sup>。

多くのインド人は、インドが世俗的国家であることに誇りを持っています。インドの世俗主義を覆そうとする政治的集団もあるのですが、インドの世俗的憲法と非宗教性を支持する大多数の国民によって、これらの動きは少なくとも今の段階では抑え込まれています。ここで、インドの歴史上もっとも力強くまた雄弁に非宗教的な国家の必要性を唱えたのが、400年前のムガル帝国のムスリム皇帝アクバルであったことを確認しておくのが重要です。確かに、宗教に中立的な国家を設立する必要性はアクバル登場の2000年近く前にすでにインドのアショカ王によって提唱されていました。アショカ王は、紀元前三世紀に国家と国民が異なった宗教に対して寛容性であり擁護すべきことを主張し、「すべての宗派はなんらかの理由により崇敬されるに値する」と力説していました。近年、インドのハリウッド映画によって制作された『アショカ』（ちなみに監督はイスラム教徒）は、この偉大なる皇帝の一生を描くにあたり、細かい部分で多少の脚色はしたかもしれませんが、アショカ王が2500年前に提唱した非宗教的思想の重要性を強調している点は正しいと言えます。それは、この世俗的思想が現代インドにおいても重要視され続けていることを示すものであり

ます。

こうした伏線があったことは確かですが、それでもやはりアクバルこそがインドの世俗主義を真に擁護した最初の皇帝であるといえましょう。なぜならば、1590年代に導入されたアクバルの法典は、現代でも広い関心を集め、法律学においても、現代インドの世俗政治における思想や優先順位に反映されているからです。アクバルの提唱した主義は法典や実践を通してのみならず、「何人たりとも宗教を理由に干渉されることなく、いかなる人も彼の好む宗教に傾倒することを許されるべきである」というような、様々な政治声明にも反映されています。「伝統への依拠」ではなく「理性の追求」が彼の基本テーマを構成した究極の指針だったのです。アクバルは、自らが追求した「理性の道」(rahi aql)のもとに、開かれた対話と選択の自由の必要性を主張し、主流であったイスラム教徒やヒンズー教徒の哲学者だけでなく、キリスト教徒、ユダヤ教徒、バルシー教徒、ジャイナ教徒、そして紀元前六世紀頃成立したインドの無神論思想の一つであるチャルヴァカの信者までも招き、繰り返し議論させたのです。

③ この点については、K.M. Sen, *Hinduism* (London: Penguin Books, 1960)を参照。またベンガル語が読める人は、同じ著者によるこのテーマを追求した古典Hindu-Mussalmaner Jukta Sadhana (「ヒンズーとムスリムの合作」)を参照。

### 内部のバリエーションと外部との対照

したがって、インドをヒンズー文明として描写するのは大きな間違いです。これと似たような粗雑さは、「西洋文明」と呼ばれるものを特徴付けるときにも見られます。ナチス・ドイツや、アジアとアフリカで植民地時代に不寛容な統治を行ったフランスやイギリス、そしてポルトガルなどの帝国が一時的に脱線したことを除けば、寛容というのは確かに近代ヨーロッパの重要な特徴ではあります。しかし、東西の間の歴史的な断絶はここにはありません。たしかに、アリストテレスは、アショカ王がそうしたように寛容を擁護しましたが、プラトンやアクイナスの思想は儒教のそれよりも権威主義的なものでした。ユダヤ人哲学者であるマイモニデスが12世紀に不寛容なヨーロッパから離れなくてはならなくなったとき、彼は避難先として寛容なアラブ世界を見つけたのです。そして、最終的には、カイロにあるサラディン王の宮廷で名誉ある地位に落ち着きます。このサラディンという人は、イスラム側に立って獅子心王リチャードその他の十字軍と戦った人です。1590年代にアグラでアクバルが宗教的寛容の宣言を発していたとき、ヨーロッパではまだ宗教裁判が行われていました。1600年には、ローマのカンポ・デイ・フィオリでジョルダノ・ブルーノが異端として火あぶりの刑に処されています。

よって、文明という基準に頼って世界を分割することの第一の問題は、その著しい粗雑さにあるといえます。

この問題は、二番目の問題によって増幅されます。それは、この分割方法が唯一適切なもので、人々のアイデンティティを同定する他の方法を圧倒する、もしくは飲み込むものであるという暗黙の前提の愚かさです。私たち一人一人の自己認識は多くの特徴を持っています。宗教は、その中で重要なものであるかもしれませんが、すべてを圧倒するほどのアイデンティティではありえないのです。

私たちは、歴史からもう一つの重要なことを学ばなくてはなりません。それは、同じ宗教を共有しているからといって、必ずしも政治に対して同じ姿勢をとり、他者に対して同じように寛容であるとは限らないということです。政治的に異端であったアクバルが、本当のイスラム教徒でありつづけたのかどうか、という繰り返し問われてきた問題を考えてみましょう。この問いは、今日的な問題、すなわち、イスラム政治の正しい見方に関する活発な議論に私たちを引き戻してくれます。アクバルは果たして敬虔なイスラム教徒だったのでしょうか、あるいは、デリーやアグラに大勢いた彼の批判者こそ「本当の」イスラム教徒だったのでしょうか。このような「二者択一」型の問いでは、白黒ははっきりさせる答えを出すことが求められます。イスラム教徒というものが宗教だけを基準に決まるもので、その人の他の属性を一切見ないということであれば、それは可能でしょう。しかし、イスラム教徒であることの重要性は認めても、それが必ずしも他のすべてを決定するような包括的なアイデンティティではないのであれば、この政治的な問題を宗教という限定的な枠の中だけで解決しようとする必要はなくなります。ここで、アクバルの政治的な世俗主義と宗教的な異端に対して、影響力の強いイスラム教徒のグループの中には足を引っ張るものだけでなく、支援していた人々がいたことを思い出すのがよいかもかもしれません。彼が1605年に亡くなったとき、アクバルの信条や宣言に対して非常に批判的であったイスラムの神学者アブドゥル・ハクも、「革新」を企てはしたものの、アクバルは「善きイスラム教徒でありつづけた」と結論せざるをえなかったのです。この考え方は、宗教が人のアイデンティティのすべてを包み込み、人の信仰や行為に一切の幅を許容しないものであるという立場をとらない人にとっては、取り立てて不思議なことではないでしょう。

基本的な論点として私が示したいのは、アイデンティティの複数性を認める必要があるということ、そして、アイデンティティをなんとなく「見つける」のではなく、責任ある人間として多様な関係や所属の中でどれを優先していくかを決めていかななくてはならないということです。これとは対照的に、「衝突」を不可避とする理論の持ち主は、分類の基準がいろいろあることの妥当性を頑なに否定しようとしたり、あるいは、暗に無視したりするのです。また、これに関連して、私たちが自らの優先順位について意思決定をする責任を負うことにも否定的なのです。

宗教に基づくアイデンティティや文明を基準にしたア

イデンティティは、非常に重要であるかもしれませんが。しかし、それはさまざまな所属の一つでしかないのです。ここでの問題は、イスラム教（ヒンズー教やキリスト教でもいいのです）が、平和を愛する宗教であるか、戦いを好む宗教であるか、ということではありません。私たちが問わなくてはならないのは、敬虔なイスラム教徒がその人の宗教的な信仰や実践を、宗教以外のコミットメントや価値観その他の個人的なアイデンティティの特徴とどのように組み合わせるのか、なのです。人の宗教的な、あるいは文明による所属先だけをとりあげて、それが他のすべてを包括するアイデンティティであるかのように扱うのは非常に問題の多い診断であるといえましょう。それぞれの宗教の熱心な信者の中には、偉大なる平和の擁護者もいましたし、凶暴な戦士もいました。どちらが「真の信奉者」で、どちらが「単なる詐欺師」であるか、を問うのは無意味です。私たちは宗教的な信仰だけに基づいて政治的、社会的優先順位を含む人生のすべてを決定するわけではありませんし、また、決定に伴う振る舞いや行動も宗教で決まるわけでもないことを認めなくてはなりません。平和や寛容を提唱する人と、戦争や不寛容を奨励する人が、同じ宗教に属することは可能なのです。それぞれ、自分たちなりに真の信奉者として、何の矛盾も感じていないことはありうるのです。宗教的なアイデンティティという領域は、それ以外の世界観や所属のすべてを消し去るものではないのです。

#### 宗教学校と理性的に考える自由

アイデンティティの問題は、子供を宗派経営の宗教学校に入れるという公共政策にも関係します。そうした学校では、「自分の文化」に関する知識が狭く教えられるために、子供たちにどう生きるかの選択をするための十分な情報を与える教育機会が著しく制約されている場合があります。教育の目的は、自分や自分の家族が何らかの形で「属している」文化を含めて、世界における様々な文化について教えることだけではありません。教育は、理性的に考える力を滋養し、後の人生で自由を行使する手助けをするために行われるのです。この問題は、理性を超えた教義に基礎をおく世界の多くの学校に対する重大な挑戦になります。パキスタンのマドラサ（訳注：イスラムの高等教育施設）は、最近、この観点から注目を浴びました。自由主義をかかげるイギリスのような国でも、この問題が深刻化しています。

フランスやドイツ、イタリアやアメリカ合衆国などとは異なり、イギリスの教育システムでは、宗派が経営するような学校での宗教教育を国立学校でも標準的に認めてきました。以前は、キリスト教とユダヤ教の学校だけに限定されていたのですが、今やそれ以外の教義に基礎をおく学校を設立することも公式のイギリス政府の政策上、認められていることなのです。すでに、イスラム教に特化した学校やシーク教の学校などがいくつか出来ていますし、ヒンズー教の教育を行う学校の設立も申請さ

れています。私の分析が正しいとするならば、こうした動きは、すでに存在する問題をさらに難しいものにするでしょう。若いイギリス人、特に南アジア出身のイギリス人のための選択肢の扉は、ますます狭くなるのです。自分がたまたま産み落とされた家族の伝統が選択を決めるものであるという間違っただけの考えが、幅広い教育を不要にしてしまうからです。ここで犠牲にされるのは、アクバルが言ったところの「理性の道」なのです。

### 自由と責任

「文明の衝突」という視点に横たわる基本的な問題は、衝突が不可避であるという議論されていない前提にあるわけではありません。この問題は、むしろ副次的で、派生的に生じるものであって、それが問題であるとしても優先すべき問題にまず答えなければなりません。より重要な問題は、世界の人々を一つの方法で、個別の文明に切り分けられるのか、ということにあります。これは、個別の文明が衝突するか否か、以前の問題です。このあまりに単純化された分類は、世界の人々の有り様や多様な相互関係について誤った理解を誘導するものでしかありません。この分類法は同時に、特定の区別だけを大げさに見せる効果があり、それ以外の分類法を排除してしまうのです。

他者との関係の持ち方や所属、そしてアイデンティティには複数の側面があります。私たちは、その中で、それぞれにどれほどの重要性を付与するのかを決めなくてはなりません。宗教的な信仰やアイデンティティは、それが選ばれたものであろうと、単に受け継がれたものであろうと、私たちの人生を支配するようなものではありませんし、私たちの内省的な意思決定を支配するものでもありません。別の選択肢がそこにあるのに、その存在を否定してしまうことは、状況の記述として間違っているだけでなく、倫理的な怠慢です。というのも、選択の行使に伴う責任まで放棄することになってしまうからです。コーランなど、同じ教典から異なる立場の引用が新聞を賑わしていますが、今日の紛争にかかわる知的な対立に伴い判断を迫られている主要な課題は、特定の宗教の「本当の」性質が何であるかといった難解な議論ではありません。むしろ、私たちの多様な所属や関係、そして価値やコミットメントのすべてを考慮した上、何をするかを決める自由と選択の重要性、そして選択に伴う個人の責任の重要性にあるのです。

イスラム教徒であることは、必ず強い闘争心や対立心が求められるのか、あるいは、英国のブレア首相が雄弁に語ったように、真のイスラム教徒は寛容でなくてはならないのか、という議論が盛んに行われています。ブレア首相がイスラム教に内在するとされる対立的な世界観を否定したことはまさに適切で非常に重要です。しかし、「真のイスラム教徒」を厳格に定義する必要がそもそもあるのかどうか、と問わなくてはなりません。人の宗教は、その人のすべてを決める必要はありませんし、それ

だけがその人のアイデンティティというわけでもありません。とくに、宗教としてのイスラム教は、一人一人の信者が責任ある選択をする可能性を消してしまうものではありません。実際、あるイスラム教徒が対立的立場をとり、別のイスラム教徒が異端に対して寛容であることはありえるし、このことを理由に、一方がイスラム教徒であることを辞める必要はありません。これは、「イジュテハット (ijtehad)」すなわち、宗教的解釈とよばれるものが幅広い許容範囲をもっているからであるだけでなく、イジュテハットがどの程度の許容範囲をもっているのか、についても意見が異なっているからなのです。

大きな宗教に基づく分類だけに注目すると、ほかに人々を突き動かしている配慮すべき関心や考え方を見落とすこととなります。それだけではありません。宗教的な権威者の声が不自然に大きくなることで、他の優先すべき事項の重要度を低下させてしまう効果があるのです。実際には、ある指導者の言うことと全く異なった考え方を多くのイスラム教徒が持っているにもかかわらず、イスラム教の指導者たちは、いわゆる「イスラム世界」を代表する職権上のスポークスマンとして扱われることになるのです。これと同じように、キリスト教やヒンズー教、ユダヤ教の指導者が「信者衆の」スポークスマンとして見られるのです。単一基準に基づく分類は、さしあたりの区別だったものを、融通のきかない杓子定規な障壁に変えてしまいます。それはまた、それぞれの宗教世界のヒエラルキーにおける権力者に他を威圧するような発言力を与えてしまうと同時に、他の宗教者の声を静め、覆ってしまう効果があるのです。

### 結論

世界を一つに結ぶ力強い源泉は、私たちが同じ人間として共有するものだけではありません。人類の共通項にどのようなものがあるかは重要であり、絶えず念頭におく価値のあることでありますが、私たちの多様性が多面的であることこそ、世界を一つにするときに欠かせないものなのです。私たちは互いに同じではないかもしれませんが、互いの異なり方もまた様々なのです。宗教や「文明」に基づくアイデンティティは重要であるかもしれませんが、それだけが重要であるわけではありません。今日の世界を席卷している決り文句は、「文明は衝突するのか」という問いの形をとります。この問いは、表面的にはとても魅力的なものですが、全く間違っただけの問いなのです。その意味では、間違っただけの問いの例として古くから知られる、「君はもう奥さんに暴力をふるうのをやめたのか」という問いによく似ています。この問いに対して「イエス」と答えたとしても、「ノー」と答えたとしても、そもそも答えようとすること自体が、全く間違っているかもしれない前提を成り立たせてしまうことにつながります。

「文明は衝突するか」という問いの場合も同様です。それにどう答えようとも、答えようとする段階で世界の

人々を「文明」という単一の基準で分けることが出来るという考え方を暗に認めることになってしまうのです。そこに基本的な間違いがあり、その間違いがわれわれを「文明の衝突」論に導いてしまうのです。衝突があるか、ないかを議論する以前の段階から問題ははじまっています。この疑わしい分類法が、便利で、世界の人々を分類する他のやり方よりも唯一適切であると考えるところで、すでに大きな間違いを犯しているからです。人類の協調も幅広い多様性も、危険なほど単純で、ばかげた公式に還元してしまうことはできません。世界は、そこで想定されているよりも、遥かにずっと豊かなのです。

アマルティア・セン博士の記念講演は、英語でスピーチが行われたが、出版物への掲載は和訳のみセン博士の了解が得られた。

本稿は、講演原稿を佐藤 仁助教授（新領域創成科学研究科）が全文和訳したものである。



講演会司会の宮島副学長



アマルティア・セン博士による記念講演

〔資料〕

東京大学名誉学位創設に係わる検討WGの設置について

補佐会

平成13年9月10日

I. 趣 旨

本WGは、東京大学において「名誉学位」制度を創設することの意義、ならびに創設する場合の制度及び関連事項を検討し、具体的な制度及び措置について提案することを目的とする。創設する制度の提案は、10月中旬を目途とする。

II. 検討事項

1. 制度創設

- (1) 名誉学位創設の意義
- (2) 名誉学位規則の立案
- (3) 名誉学位記の様式等

2. 学位授与式典関係

3. その他

III. 構 成

座 長 廣渡総長特別補佐

メンバー 立花総長補佐（文）、福山総長補佐（薬）、荒川総長補佐（学環）、企画調整官、総務部長  
関係担当課 総務課、学務課、主計課、国際交流課

## 東京大学名誉博士称号授与規則

平成13年11月20日  
評 議 会 可 決

### (目的)

第1条 この規則は、学術文化の発展に特に顕著な貢献をした者、又は東京大学（以下「本学」という。）の教育研究の発展に特に顕著な功績があった者を顕彰することが、本学における教育研究の発展及びその基盤を社会に対して顕らかにし、本学の国際的地位を確固たるものとしていく上で極めて有意義であることにかんがみ、東京大学名誉博士（以下「名誉博士」という。）の称号を創設し、もって世界における学術文化の一層の発展に寄与することを目的とする。

### (授与の要件)

第2条 名誉博士の称号は、次の各号の一に該当する者に授与することができる。

- (1) 学術文化の発展に特に顕著な貢献があり、本学において顕彰することが適当と認められる者
- (2) 本学の教育研究の発展に関して、国際的観点からその功績が特に顕著であった者

### (推薦及び授与手続)

第3条 総長は、前条に該当すると認められる者がある場合、評議会の議を経て、名誉博士の称号を授与する。

2 前項のほか、部局長は、前条に該当すると認められるものがある場合、当該部局の教授会等の議を経て、これを総長に推薦することができる。推薦に当たっては、別記様式1の推薦書を提出するものとする。

3 総長は、前項の推薦があったときは、評議会の議を経て、名誉博士の称号を授与する。

4 評議会において、名誉博士の称号授与の議決をするためには、評議員定数の2分の1を超え、かつ、外国出張中の者を除く評議員総数の4分の3以上の者が出席し、出席者の4分の3以上の者の賛成がなければならないものとする。

### (審査委員会)

第4条 総長は、前条の規定により名誉博士の称号を授与しようとするときは、評議会の議に先立ち、名誉博士称号授与審査委員会（以下本条において「審査委員会」という。）を設置し、審査を行うものとする。

2 審査委員会は、総長、副学長、各研究科長（研究科以外の教育研究上の基本となる組織の長を含む。）及び各附置研究所長（先端科学技術研究センター長を含む。）で組織する。

3 審査委員会に委員長を置き、総長をもって充てる。

4 審査委員会は、必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聞くことができる。

5 前各項に定めるもののほか、審査委員会の運営に関し必要な事項は、審査委員会が定める。

### (名誉博士記の交付)

第5条 名誉博士の称号を授与するときは、別記様式2により名誉博士記を交付する。

### (細則)

第6条 この規則に定めるもののほか、名誉博士の称号授与に関し必要な事項は別に定める。

### 附 則

この規則は、平成13年11月20日から施行する。

### 別記様式1

年 月 日

東京大学総長 殿

官職・氏名

東京大学名誉博士称号授与候補者推薦書

下記の者は、東京大学名誉博士の称号を授与するにふさわしいと認められますので、関係書類を添えて推薦します。

記

(フリガナ)

氏 名

生 年 月 日

性 別

国 籍

\* 関係書類として、推薦理由、略歴、功績の調書を添付すること。

## 東京大学名誉博士称号授与に関する申合せ

平成13年11月20日  
評議会可決

### 別記様式 2

名博第 号

名 誉 博 士 記

氏 名

1 あなたは学術文化の発展に特に顕著な貢献をされました本学はその貢献に対して東京大学名誉博士の称号を授与しその栄誉を顕彰します

2 あなたは本学の教育研究の発展に関して国際的観点から特に顕著な功績を挙げられました本学は東京大学名誉博士の称号を授与しその栄誉を顕彰します

年 月 日

東京大学総長 氏 名 印

東京大学（以下「本学」という。）における名誉博士の称号授与については、東京大学名誉博士称号授与規則（以下「規則」という。）の定めによるほか、次のとおり申し合わせるものとする。

- 1 名誉博士の称号を授与するに当たっては、当分の間、規則第2条に定める他、次の各号を考慮するものとする。
  - (1) 国外における教育研究上の功績、学術文化の発展への貢献が特に顕著な者を優先する。
  - (2) 定員内の教職員として本学に在籍し又は在籍したことのある者は、原則として、授与対象としないものとする。
- 2 称号を授与する際には、授与される者の功績を記載した文書を添付するものとする。
- 3 名誉博士の称号を授与された者は、授与に際し、講演を行うことを常例とする。

名誉博士称号授与式・記念講演会  
Honorary Title Conferment Ceremony and Commemorative Lecture

2002. 2. 19

## I. 名誉博士称号授与式

The Conferment of Honorary Title

1. 開式  
Opening
2. アマルティア・セン博士の功績  
Professor Amartya Sen's Achievements
3. 名誉博士記授与  
Conferment of the Title of Honorary Doctor
4. 記念品贈呈  
Commemorative Presentation
5. 総長挨拶  
Oration by President Takeshi Sasaki
6. アマルティア・セン博士挨拶  
Address by Professor Amartya Sen
7. 閉式  
Closing

## II. アマルティア・セン博士記念講演会

Commemorative Lecture by Professor Amartya Sen

“Questioning the Question: Do Civilizations Clash?”

名誉博士称号授与を伝える新聞記事の一覧

年 月 日	朝・夕刊別	新聞名	掲載面	表 題
平成14年2月20日	朝 刊	朝日新聞	37面	「東大名誉博士1号」
		産経新聞	30面	「セン博士に東大名誉博士号」
		東京新聞	28面	「ノーベル経済学賞のセン教授 東大が名誉博士号授与」
平成14年2月24日	朝 刊	朝日新聞	23面	「『文明の衝突』論を批判 東大初の名誉博士セン氏が記念講演会 「多様な現実ゆがめる」」

## 〈カクテルパーティー〉



パーティー全景



参加者たちと歓談するアマルティア・セン博士

## 〈記者会見〉



左から、石川正俊広報委員長、廣渡清吾総長特別補佐、佐々木毅総長、アマルティア・セン博士、佐藤仁助教授（創域）、チェン・ポール教授（法）、岩井克人経済学研究科長



名誉博士記



佐々木総長による挨拶



学位記の授与



佐々木総長と握手をするアマルティア・セン博士

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務課広報室を通じて行ってください。

No. 1238 2002年5月8日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学総務課広報室 ☎ (3811) 3393

e-mail kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

ホームページ <http://www.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>